

*SF*



「シリーズ  
SFで哲学する」  
ラボカフェ in 大阪  
(2014.12.3)



SFアニメと哲学対話  
(2014.5.31)



## 『銀河鉄道999』を使った哲学対話

～モヤモヤ感の探究

稲原 美苗

幼い頃、いつも『銀河鉄道 999』（松本零士、1979 年）という SF アニメ作品をテレビで観ていた。『銀河鉄道 999』では「機械と人間」や「永遠の命」という非常に哲学的なテーマを扱っていて、様々なことを考えさせられた。また、番組鑑賞後にいつもモヤモヤ感が残ったことを今でも覚えている。どうしてモヤモヤ感が残ったのだろうか。それは、ストーリーの中にはっきりとしない何かが存在し、その存在に対して不快感を覚えたからだと思う。さらに、その世界観は生身の人間である私が期待しているようなものではなく、子どもだった私が好むような単純明快なハッピーエンドなストーリーでもなかった。それでもこの SF アニメ作品を見続けていたのは、モヤモヤ感が癖になったというより——この作品で描かれた世界と現実の世界が複雑に交差し、「人間とは何か」というような哲学的な難題も浮上したが——単純に「機械（不老不死）の身体を持ちたいか」という疑問に対して答えを探すようになったからだった。

『銀河鉄道 999』の粗筋をまとめてみようと思う。主人公の星野鉄郎が暮らしている地球では、機械が全てを支配し、生身の人間は虫けらのように扱われている。身体を機械にする技術が発展し、人間は不老不死になった。そのような時代にも、貧しい人々は存在する。彼らにとって、機械の身体は高価なものであり、購入不可能な状態だった。そのような時、「銀河鉄道 999 に乗れば、無償で機械の身体を貰える星に行ける」という噂が流れる。鉄郎は母と二人、その噂をたよりに銀河鉄道の停車駅、メガロポリスに向かおうとする。その途中、二人は機械伯爵による人間狩りに遭い、母親は射殺されてしまう。やっとの思いでメガロポリスのスラムに辿り着いた鉄郎は、銀河鉄道のパスを手に入れる機会を伺い、実行に移すが、失敗に終わる。しかし、偶然に知り合った謎の美女メーテルから銀河超特急 999 号のパスをもらい受けて、鉄郎は彼女とともに宇宙へ旅立つのだ。アニメ番組では、その旅の過程と鉄郎の成長が描かれている。つまり、そのアニメを観ていた私は鉄郎の視点からその世界を見続けていた。鉄郎と同じように、視聴者である私も多くの惑星を旅して、出会いと別れを繰り返し、機械への憧れがなくなり、機械中心社会に関して疑問を持つようになった。幼かった私が抱いていたあのモヤモヤ感は、SF アニメの中の鉄郎が葛藤していたことと直接つな

がっていたように思う。鉄郎とともに視聴者であった私が「なぜ人間は死ぬのか」「命とは何か」「機械の身体（永遠の命）を手に入れることは本当に良いのだろうか」などを何度も問い直す作業の中で抱いたモヤモヤ感は、どこことなく哲学対話の中で抱くモヤモヤ感に似ている。

中年になった私が再度『銀河鉄道 999』を鑑賞しても、モヤモヤ感を覚えた。それは、私たちが見ないふりをして続けている現代社会の問題をこの作品があぶり出しにしているからだ。私は「それらの問題をそのまま放置しておいても良いのか」と、自問し始めた。私たちは日常生活に違和感や不安感をもっていることが多い。しかしながら、「それが何なのか」を問うことをなんとなく禁じられてしまっている。日常のフレームを越えて、空想の奇妙な世界を眺めることによって、私たちの中に潜んでいる違和感や不安感が浮き上がって見えるようになる。そのようなレリーフ効果を見せてくれるというのが、私がSFアニメ作品を好む理由である。

さて、前置きは長くなったが、SFアニメ作品と哲学対話の繋がりについて少し説明しておこう。2014年5月31日（土）に東京大学駒場キャンパスにて、哲学対話ワークショップ「銀河哲学ガイド～銀河鉄道でめぐる思考の天の河～」を開催した。『銀河鉄道 999』をP4Eのイベントに使おうと決めるまで紆余曲折があった。この企画が浮上したのは、小村優太さんと私がFacebook上でSFアニメ作品がいかに哲学的な問いを投げかけているのかという議論を始めたからであり、SFアニメ作品と哲学対話の相性が良いのではないかと、二人で熱く語り合ったことがきっかけになった。しかし、あらゆる年齢層、性別、職業を問わず哲学することが可能な題材を選ぶのは非常に難しかった。さらに、イベントが土曜日の午後という時間帯に開催されることを考えた際、子どもたちの参加も予想できたので、どのような作品でも良いというわけではなかった。小村さんと私で何度も話し合っ、『銀河鉄道 999』を哲学対話の題材として選んだ。

この哲学対話のワークショップの前半部分で、私は、私自身の障害（軽度の脳性まひ）とSF的な身体認識の親和性についてお話をさせてもらった。例えば、『銀河鉄道 999』の中では、「機械の身体>生身の身体」という常識（思い込み）ができあがった世界を描いているが、鉄郎は旅の過程でその常識に対して疑問を持ち始め、ついに、「生身の身体」とともに生きることが自分らしい生き方だと確信する。障害当事者である私は、「健常（正常）な身体>障害のある異常な身体」という常識（思い込み）が人々を支配している健常者中心社会に対して疑問

をもって生きてきた。「生身の身体」の良さを確信できるようになった鉄郎と私自身の障害に対する感情とが重なってモヤモヤ感を覚えた。つまり、『銀河鉄道 999』の本質の一つに、私たちの日常的な思い込みをずらしていく効果が挙げられる。この作品を鑑賞する中で、私たちは自らの身体性と脆弱性に立ち返り、生命の有限性と直面する。この作品には、私たち自身に問いをぶつける鏡のような効果がある。

『銀河鉄道 999』を鑑賞しながら、私は身体や生命に対して不思議を感じた。この不思議が重要な「感覚」であり、この不思議感をもつことによって問いがたくさん生まれる。例えば、子どもの頃、「どうしてジェット機が空を飛ぶのだろう」と、不思議に感じた。技術的にどうだとかいう疑問ではなく、あのような重たい物体が空を飛ぶのが純粹に不思議だった。しかし、大人になると不思議に感じる機会が激減していった。しかし、SF アニメ作品に触れると、私の常識や価値観の転倒が起こることがしばしばある。私はこの「価値観の転倒」が哲学へと結びつくと考えている。特に、『銀河鉄道 999』を使った哲学対話では、参加者全員がそれぞれの疑問を出し合い、そこから対話の問いを絞っていった。「機械の身体と生身の身体の違いは何か」、「機械化惑星はどのような世界なのか」、「永遠の生命をもったら私たちはどう生きるのだろうか」、「機械の身体になったら意識はどこにあるのか」など、多くの興味深い問いが出てきた。その問いを大きく三つに整理し、参加者を三つのグループに分けて対話をするようになった。私も対話に参加させてもらった。年配の方と小学生数名が私のグループ内にいたので、対話の流れが世代によって異なることも感じられて、楽しかった。

私の記憶が正しければ、「機械の身体を手に入れたいか」という問いが出たように思う。実際に手に入れたいと答えた人は殆どいなかったが、「不老不死の身体」と言い換えると、対話の流れが少し変わったように思えた。小学生の参加者は「機械も故障する」と言うような発言をした際、私はハッとした。『銀河鉄道 999』の中では生身の身体に対する機械の身体の優位性という先入観が想定されていたが、対話の中でその先入観は大きく揺さぶられることになった。現象学やフェミニズム思想を専門に研究している私は、常に人間の身体性や生命の有限性について考え、人間の身体は変化していく脆弱なものだと考えてきたが、機械も人間と同様に脆弱だという子どもたちからの意見によって、「機械は不変で無限なもので、決して疲れない存在である」という私の中にあった先入見は覆された。その後も、機械の身体になるということは、確かに不老不死な状態を作り出すことかもしれないが、身体が老いないことを望むなら、成長しないことを望む

ことになるのではないか、老いることと成長は切り離せるのか、などという問いも出た。もう少しの間議論を続けることもできたのだが、イベント終了時間の16時になってしまった。そこで対話も打ち切れ、「もう少し対話を続けたい」という気持ちを抱いたままこのワークショップは終了した。しかし、対話をあと30分ほど続けたとしても最終的な合意や答えを得る段階まで至らなかっただろう。私は、幼い頃に『銀河鉄道999』を鑑賞した時と同じようなモヤモヤ感を残したまま、駒場のワークショップ会場を後にした。

このモヤモヤ感は帰阪中の新幹線の中でも続いた。私の中では「健全な身体への憧れ」は消えなかったし、鉄郎のように「自分が生きている身体」を肯定し、この身体が「人間（自分）らしい」と思えるようにはなれなかったのだ。頭では「私はこの身体を生きている」ということはよく分かっている。だが、私の中ではなかなか割り切れていないようにも思う。このワークショップに参加させてもらったことで、私自身の障害と自己変容に関する更なる探究へつなげられた。この哲学対話にはある種の自己変容効果があるように感じた。その過程の中で、ただ私の障害に対する心情を抑制し、健全者中心社会に適応することを求めるものではなく、私自身の問題の真の在りかを明らかにして、対処方法を吟味してみるという効果があるような気がした。

SFアニメ作品を使うことによるメリットとしては、少し距離を置いて身近なテーマを設定でき、参加者たちが自分たち自身で問題を出し合い、意見を表明し合って問題についての理解をともに深めながらも、その場で答えを出さずに、問いを持ち帰ってさらに考えるというタイプの対話が挙げられると思う。そして、SF的なテーマ設定から現実問題の議論に至る過程で哲学対話が担う役割とは、「問題を解決する」ことではなくて、自己変容を促進するために、質問を投げかけることであり、自分とその世界を異なる角度から眺めてみることである。哲学対話とSF作品は相性が良いと、私は考えている。それは両者が問題提起や価値観の転倒を続け、私たちのモヤモヤ感を増幅させる要素をもっているからだろう。最後になったが、小村さんと一緒にアイデアを出し合ってSFアニメ作品を哲学対話に取り入れてきたが、結果的に参加者のモヤモヤ感を増したという実感を得た。このモヤモヤ感が哲学対話では必要な要素だと思う。今後も継続していきたいプロジェクトの一つだと確信している。

## SF と哲学対話 ～ 日常という薄い膜への警告者

小村 優太

UTCPにおいて、SFと哲学対話がはじめて融合したのは2014年5月31日のことだった。(このあたりの成り立ちについては、稲原氏の文章を参考にしてほしい。)それ以来、とくに決心したというわけでもないが、私はSFと哲学対話を結び付けたりつなげたりしている。UTCP以外にも、駒場祭、大阪大学など、出張イベントのようなものもやってきた。けっして数多くのSF哲学対話イベントをやってきたわけではないが、私はここで、これまでの経験をもとにしながら、SFと哲学対話の近さについて、そして哲学対話がSFという物語を必要とするということについて話そうと思う。

SFとは何か、という定義をここで議論するつもりはない。「Science Fiction」の略でもいいし、「Science Fantasy」でもいい、「すこし・ふしぎ」の略だと言っても問題ない。私にとってSFとは、私たちが何の気なしに生活している日常の世界が、いかに薄っぺらい膜に覆われた、あやふやな存在かを気付かせてくれるものである。ある寒い朝、冷える両手をこすりながら道を抜けると、昨日まで湖だった場所が一面の氷になっている。私たちは歓声を上げる。しかし、一見すると堅固に思われる氷のフィールドは、じつはほんのうっすら氷が張っているにすぎず、その下には相も変わらず冷たい水が控えている。私たちは氷のフィールドで遊ぶうちに、いつのまにか、そこはかつて湖で(かつて、というより、正確には昨日までだ)、氷などなく、その上を歩くことなどできなかったことを忘れてしまう。私たちは、たったひと晩で凍った湖の上をはしゃぎまわる子どもたちのようだということを往々にして忘れているか、もしくは最初から気付いていない。ここで「そこにちゃんとした地面なんてなくて、薄い氷の膜が張っているだけだぞ」と教えてくれるのがSFだ。ただし、こういった警告をしてくれるのは、じつはSFに限らない。優れた小説・映画・マンガ等は多かれ少なかれこのような側面をもっている。しかしSFがそういった作品のなかでも特徴的なのは、SFがまさにこういった「警告」という役割を自覚的に担っているということだろう。

たとえば、最初にUTCPで題材にした『銀河鉄道999』は、人間の身体と機械の身体という対立を提示することによって、生身の身体とは？ 身体と心の境界線とは？といった疑問を投げかけてくる。たとえ松本零士の描く世界そのものはきわめて浪花節的な男の世界であったとしても。

大阪大学で使用了『X-Men』シリーズは、超能力をもつミュータントを登場させることによって、少数派への差別、普通とは何か?といった問題を浮き彫りにする。そもそも『X-Men』が生まれた背景にはアメリカの公民権問題などがあり、彼らは最初から社会性を多分に担わされたヒーローたちだった。それに、一見お気楽なアメリカン・ヒーローの代名詞とされるスーパーマン(1938年〜)も、原作者ジェリー・シーゲルとジョー・シャスターのユダヤ人性を投影され、「迫害を受け正体を隠す超人」として造形されており(まるでニーチェの悪質なパロディのようだ)、アメリカン・コミックのヒーローは案外複雑な背景をもっていることが多い。

駒場祭で使用了『転校生』は、男女が入れ替わるという設定によって、性別とは?男と女とは?別人の立場になるとは?といったことを問いかけてくる。男女を入れ替えるという物語の系譜には長い歴史があり、さいきんでは『ストップ!! ひばりくん!』や『らんま1/2』、古典文学に範を求めれば『とりかへばや物語』などを挙げることができるだろう。この系譜をさらに辿ればプラトンの『饗宴』における、神に引き裂かれる前の男女融合した完全な人間の挿話にまで遡り、SFと哲学の幸福な結婚が達成されることになるだろう。

翻って、哲学の方に目を向ければどうだろうか。先ほどは挙げなかったが、哲学こそ「警告」を発する役割をもっとも自覚的に担っていると言えるのではないか。しかし、哲学は往々にして間口が狭い。まるで水分を完全に抜いて乾燥させた食材のようだ。栄養価は高いし、味も素晴らしいが、そのままでは食べることができない。プラトンの対話篇のいくつかなら、そのまま食べることもできるかもしれないが、アリストテレスになるともうお手上げである。そのまま噛みついて、歯の方が折れてしまうかもしれない。後期古代や中世に書かれた註釈哲学に至っては、そもそも食べられるような外見をしていると言い難い。その点、哲学対話はかなり食べやすくなっている。本来ごつごつして食べにくい哲学を、対話という形式にすることによって、特殊な用語や思考法を必要とすることなく味わうことができる。そして私が思うに、そのさい哲学対話の題材としてSFはとてもよく馴染んでいる。両者ともに、日常という薄い膜のもろさを警告してくれる。

私たちは日常生活を生きるうえで、ふだん日常のもろさを意識しない。意識しないが、それでいいのだ。本当は薄い氷の上で遊んでいることに気付いてしまったら、とても無邪気に楽しむことなんてできやしない。私たちの日常は、その薄い氷の上に建てられているのだから、氷に気付かず、または気付かないふりをして、薄い氷の上で飛んだり跳ねたりするしかない。SFや哲学は、それに一時の

警告を与えてくれる。「きみの踏みしめている氷は、実は薄い膜かもしれないよ」と。それがあまりにも強い劇薬になる必要はない、と私は思う。この薄い膜がいつ破れやしないかと不安になって、日常生活がまともに送れなくなるようでは困るのだ。日常が薄い膜に過ぎないことを意識するのは良いが、その意識に取り込まれてしまっただけではいけない。そして、強い哲学は、ややもするとこの種の劇薬になる危険性も秘めている。その点、SFは安心である。物語という外衣をまとうことによって、すべてを「～というお話がありました」という構図の中に回収してくれる。（それが本当にたんなる「お話」かどうかは関係ない。ここで大事なのはあくまでも、それが「お話として回収される」という構図だ。）哲学はときとして、暴力的なまでに「真理」を突き付けてくる。「お前の日常は、ただの薄い膜にすぎないんだぞ！ さあどうする！」と。こちらの都合などお構いなしである。しかしSFはそこに、物語という逃げ道を用意してくれる。物語には、「真理」のもつ押し付けがましさを、独善性がない。

私たちの大部分は、結局なんだかんだと騒いでも、日常という薄い膜の上で暮らさざるを得ない。すべてを捨てて神を求める暮らしをおこなった沙漠の隠修士のように暮らせる人間は多くない。私たちは哲学による警告を受けたあと、その警告を携えてもう一度、薄い膜を踏みしめなければならないのだ。この薄い氷の膜の下には、底知れない水が潜んでいるということを心の片隅にとどめ置きながら。日常という薄い膜をあたかも堅固な大地だと思い込んで、その上で無邪気に飛び跳ねるのは、とても危険なことである。調子に乗って踏み抜いてしまうとも限らない。その点において、私たちは哲学という警告者を必要とする。しかし哲学の「真理」はときとして余りにも強く、二度と日常という薄い氷の膜を踏めなくしてしまう危険性もある。沙漠の隠修士になれる人はそうすれば良い。しかしもう一度あの氷の膜を踏みしめなければならない私たちには、あの「真理」は強すぎるのだ。だからこそ、物語という形で警告してくれるSFが必要なのだ。「きみの踏みしめている氷は、実は薄い膜かもしれないよ」という警告を発したあとに、「～という物語があつてね」と付け加えてくれる、SFの哲学が。そうして私たちはもう一度、こんどは幾分か用心しながら、日常という薄い氷の膜の生活に舞い戻ることができるのだ。

